

オツベルと象

宮沢賢治

……ある牛飼いがものがたる

第一日曜

オツベルときたら大したもんだ。稻扱器械の六台も据えつけて、のんのんのんのんのんと、大そろしない音をたててやつている。

十六人の百姓どもが、顔をまるつきりまつ赤にして足で踏んで器械をまわし、小山のように積まれた稻を片づばしから扱いて行く。藁はどんどんうしろの方へ投げられて、また新らしい山になる。そこらは、糲や藁から発つたこまかん塵で、変にぼうつと黄いろになり、まるで沙漠のけむりのようだ。

そのうすくらゐ仕事場を、オツベルは、大きな琥珀のパイプをくわえ、吹殻を藁に落さないよう、眼を細くして気をつけながら、両手を背中に組みあわせて、ぶらぶら往つたり来たりする。

小屋はずいぶん頑丈で、学校ぐらいもあるのだが、何せ新式稻扱器械が、六台もそろつてまわつてゐるから、のんのんのんのんふるうのだ。中にはいるとそのために、すっかり腹が空くほどだ。そしてじっさいオツベルは、そいつで上手に腹をへらし、ひるめしどきには、六寸ぐらゐのビフテキだの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのをたべるのだ。

とにかく、そうして、のんのんのんのんやつていた。そしたらそこへどういうわけか、その、白象がやつて來た。白い象だぜ、ベンキを塗つたのでないぜ。どういうわけで來たかつて？ そいつは象のことだから、たぶんぶらつと森を出て、ただなにとなく來たのだろう。

そいつが小屋の入口に、ゆつくり顔を出したとき、百姓どもはぎよつとした。なぜぎよつとした？ よくきくねえ、何をしだすか知れないじやないか。かかり合つては大へんだから、どいつもみな、いつしょうけんめい、じぶんの稻を扱いていた。

ところがそのときオツベルは、ならんだ器械のうしろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらつと鋭く象を見た。それからすばやく下を向き、何でもないというふうで、今までどおり往つたり來たりしていたもんだ。

するとこんどは白象が、片脚床にあげたのだ。百姓どもはぎよつとした。それでも仕事が忙しいし、かかり合つてはひどいから、そつちを見ずに、やつぱり稻を扱いていた。

オツベルは奥のうすくらゐところで両手をポケットから出して、も一度ちらつと象を見た。それからいかにも退屈そうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭のうしろに組んで、行つたり來たりやつていた。ところが象が威勢よく、前肢二つつきだして、小屋にあがつて來ようとする。百姓どもはぎくつとし、オツベルもすこしきよつとして、大きな琥珀のパイプから、ふつとけむりをはきだした。それでもやつぱりしらないふうで、ゆつく

りそこらをあるいていた。

そしたらとうとう、象がのこのこ上つて來た。そして器械の前のとこを、呑氣にあるきはじめたのだ。

ところが何せ、器械はひどく廻つていて、糲は夕立か霰のように、パチパチ象にあたるのだ。象はいかにもうるさいらしく、小さなその眼を細めていたが、またよく見ると、たしかに少しわらつていた。

オツベルはやつと覚悟をきめて、稻扱器械の前に出て、象に話をしようとしたが、そのとき象が、とてもきれいな、鶯みたいない声で、こんな文句を云つたのだ。

「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂がわたしの歯にあたる。」

まつたく糲は、パチパチパチ歯にあたり、またまつ白な頭や首にぶつつかる。さあ、オツベルは命懸けだ。パイプを右手にもち直し、度胸を据えて斯う云つた。

「どうだい、此處は面白いかい。」

「面白いねえ。」象がからだを斜めにして、眼を細くして返事した。

「ずうつとこつちに居たらどうだい。」

百姓どもははつとして、息を殺して象を見た。オツベルは云つてしまつてから、にわかにがたがた顛え出す。ところが象はけろりとして

「居てもいいよ。」と答えたもんだ。

「そうか。それではそうしよう。そういうことにしようじやないか。」オツベルが顔をくしゃくしやにして、まつ赤になつて悦びながらそう云つた。

どうだ、そうしてこの象は、もうオツベルの財産だ。いまに見たまえ、オツベルは、あの白象を、はたらかせるか、サークัส団に売りとばすか、どつちにしても万円以上もうけるぜ。

第二日曜

オツベルときたら大したものだ。それにこの前稻扱小屋で、うまく自分のものにした、象もじつさい大したものだ。力も二十馬力もある。第一みかけがまつ白で、牙はぜんたいきれいな象牙でできている。皮も全体、立派で丈夫な象皮なのだ。そしてずいぶんはたらくもんだ。けれどもそんなに稼ぐのも、やつぱり主人が偉いのだ。

「おい、お前は時計は要らないか。」丸太で建てたその象小屋の前に来て、オツベルは琥珀のパイプをくわえ、顔をしかめて斯う訊いた。

「ぼくは時計は要らないよ。」象がわらつて返事した。

「まあ持つて見ろ、いいもんだ。」斯う言いながらオツベルは、ブリキでこさえた大きな時計を、象の首からぶらさげた。

「なかなかいいね。」象も云う。

「鎖もなくちやだめだろう。」オツベルときたら、百キロもある鎖をさ、その前肢にくつつけた。

「うん、なかなか鎖はいいね。」三あし歩いて象がいう。

「靴をはいたらどうだろう。」

「ぼくは靴などはかないよ。」

「まあはいてみろ、いいもんだ。」オツベルは顔をしかめながら、赤い張子の大きな靴を、象のうしろのかかとにはめた。

「なかなかいいね。」象も云う。

「靴に飾りをつけなくちゃ。」オツベルはもう大急ぎで、四百キロある分銅を靴の上から、穿め込んだ。

「うん、なかなかいいね。」象は「あし歩いてみて、さもうれしそうにそう云つた。

次の日、ブリキの大きな時計と、やくざな紙の靴とはやぶけ、象は鎖と分銅だけで、大よろこびであるいて居つた。

「済まないが税金も高いから、今日はすこし、川から水を汲んでくれ。」オツベルは両手をうしろで組んで、顔をしかめて象に云う。

「ああ、ぼく水を汲んで来よう。もう何ばいでも汲んでやるよ。」

象は眼を細くしてよろこんで、そのひるすぎに五十だけ、川から水を汲んで来た。そして菜つ葉の畑にかけた。

夕方象は小屋に居て、十把の藁をたべながら、西の三日の月を見て、

「ああ、稼ぐのは愉快だねえ、さっぱりするねえ」と云つていた。

「済まないが税金がまたあがる。今日は少しだけ森から、たきぎを運んでくれ」オツベルは房のついた赤い帽子をかぶり、両手をかくしにつつ込んで、次の日象にそう言つた。

「ああ、ぼくたきぎを持つて来よう。いい天気だねえ。ぼくはぜんたい森へ行くのは大きなんだ」象はわらつてこう言つた。

オツベルは少しごよつとして、パイプを手からあぶなく落としそうにしたがもうあのときは、象がいかにも愉快なふうで、ゆっくりあるきだしたので、また安心してパイプをくわえ、小さな咳を一つして、百姓どもの仕事の方を見に行つた。

そのひるすぎの半日に、象は九百把たきぎを運び、眼を細くしてよろこんだ。

晩方象は小屋に居て、八把の藁をたべながら、西の四日の月を見て

「ああ、せいせいした。サンタマリア」と斯うひとりごとしたそうだ。

その次の日だ、

「済まないが、税金が五倍になつた、今日は少しだけ鍛冶場へ行つて、炭火を吹いてくれないか」

「ああ、吹いてやろう。本気でやつたら、ぼく、もう、息で、石もなげとばせるよ」

オツベルはまたどきつとしたが、気を落ち付けてわらつていて。

象はのそのそ鍛冶場へ行つて、べたんと肢を折つて座り、ふいごの代りに半日炭を吹いたのだ。

その晩、象は象小屋で、七把の藁をたべながら、空の五日の月を見て

「ああ、つかれたな、うれしいな、サンタマリア」と斯う言つた。

「ああ、つかられたな、うれしいな、サンタマリア」と斯う言つた。

どうだ、そうして次の日から、象は朝からかせぐのだ。藁も昨日はただ五把だ。よくまあ、五把の藁などで、あんな力ができるもんだ。

じつさい象はけいざいだよ。それというのもオツベルが、頭がよくてえらいためだ。オツベルときたら大したもんさ。

オツベルかね、そのオツベルは、おれも云おうとしてたんだが、居なくなつたよ。まあ落ちついてきたまえ。前にはなしたあの象を、オツベルはすこしひどくし過ぎた。しかたがだんだんひどくなつたから、象がなかなか笑わなくなつた。時には赤い竜の眼をして、じつとこんなにオツベルを見おろすようになつてきた。

ある晩象は象小屋で、三把の藁をたべながら、十日の月を仰ぎ見て、

「苦しいです。サンタマリア。」と云つたということだ。

こいつを聞いたオツベルは、ことごと象につらくした。ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに座り、藁もたべずに、十一日の月を見て、

「もう、さようなら、サンタマリア。」と斯う言つた。

「おや、何だつて？ さよならだ？」月が俄かに象に訊く。

「ええ、さよならです。サンタマリア。」

「何だい、なりばかり大きくて、からつきし意氣地のないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいいや。」月がわらつて斯う云つた。

「お筆も紙もありませんよう。」象は細ういきれいな声で、しくしく泣き出した。「そら、これでしよう。」すぐ眼の前で、可愛い子どもの声がした。象が頭を上げて見ると、赤い着物の童子が立つて、硯と紙を捧げていた。象は早速手紙を書いた。

「ぼくはずいぶん眼にあつてゐる。みんなで出て来て助けてくれ。」

童子はすぐに手紙をもつて、林の方へあるいて行つた。赤衣の童子が、そうして山に着いたのは、ちょうどひるめしごろだつた。このとき山の象どもは、沙羅樹の下のくらがりで、暮などをやつていたのだが、額をあつめてこれを見た。

「ぼくはずいぶん眼にあつてゐる。みんなで出てきて助けてくれ。」

象は一せいに立ちあがり、まつ黒になつて吠えだした。

「オツベルをやつつけよう」議長の象が高く叫ぶと、

「おう、でかけよう。グララアガア、グララアガア。」みんながいちどに呼応する。

さあ、もうみんな、嵐のように林の中をなきぬけて、グララアガア、グララアガア、野原の方へとんで行く。どいつもみんなきちがいだ。小さな木などは根こぎになり、藪や何かもめちやめちやだ。グワア グワア グワア、花火みたいに野原の中へ飛び出した。それから、何の、走つて、走つて、とうとう向うの青くかすんだ野原のはてに、オツベルの邸の黄いろな屋根を見附けると、象はいちどに噴火した。

グララアガア、グララアガア。その時はちょうど一時半、オツベルは皮の寝台の上でひるねのさかりで、鳥の夢を見ていたもんだ。あまり大きな音なので、オツベルの家の百姓どもが、門から少し外へ出て、小手をかざして向うを見た。林のような象だろう。汽車より早くやつてくる。さあ、まるつきり、血の氣も失せてかけ込んで、

「旦那あ、象です。押し寄せやした。旦那あ、象です。」と声をかぎりに叫んだもんだ。ところがオツベルはやつぱりえらい。眼をぱつちりとあいたときは、もう何もかもわかつっていた。

「おい、象のやつは小屋にいるのか。居る？居る？居るのか。よし、戸をしめる。戸をしめるんだよ。早く象小屋の戸をしめるんだ。ようし、早く丸太を持って来い。とじこめちまえ、畜生めじたばたしやがるな、丸太をそこへしばりつける。何ができるもんか。わざと力を減らしてあるんだ。ようし、もう五六本持つて来い。さあ、大丈夫だ。大丈夫だとも。あわてるなつたら。おい、みんな、こんどは門だ。門をしめる。かんぬきをかえ。つっぱり。つっぱり。そうだ。おい、みんな心配するなつたら。しつかりしろよ。」オツベルはもう支度ができる、ラッパみたいないい声で、百姓どもをはげました。ところがどうして、百姓どもは気が感じやない。こんな主人に巻き添いなんぞ食いたくないから、みんなタオルやはんけちや、よごれたような白いようなものを、ぐるぐる腕に巻きつける。降参をするしるしなのだ。

オツベルはいよいよやつきとなつて、そこらあたりをかけまわる。オツベルの犬も気が立つて、火のつくように吠えながら、やしきの中をはせまわる。

間もなく地面はぐらぐらとゆられ、そこらはばしやばしやくらくなり、象はやしきをとりまいた。グララアガア、グララアガア、その恐ろしいさわぎの中から、

「今助けるから安心しろよ。」やさしい声もきこえてくる。

「ありがとう。よく来てくれて、ほんとに僕はうれしいよ。」象小屋からも声がする。さあ、そうすると、まわりの象は、一そうひどく、グララアガア、グララアガア、屏のまわりをぐるぐる走つているらしく、度々中から、怒つてふりまわす鼻も見える。けれども屏はセメントで、中には鉄も入つてゐるから、なかなか象もこわせない。屏の中にはオツベルが、たつた一人で叫んでいる。百姓どもは眼もくらみ、そこらをうろうろするだけだ。そのうち外の象どもは、仲間のからだを台にして、いよいよ屏を越しかかる。だんだんにゆうと顔を出す。その皺くちやで灰いろの、大きな顔を見あげたとき、オツベルの犬は気絶した。さあ、オツベルは射ちだした。六連発のピストルさ。ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア、ドーン、グララアガア、ところが弾丸は通らない。牙にあたればはねかえる。一足なぞは斯う言つた。

「なかなかこいつはうるさいねえ。ぱちぱち顔へあたるんだ。」

オツベルはいつかどこかで、こんな文句をきいたようだと思ひながら、ケースを帶からつめかえた。そのうち、象の片脚が、屏からこつちへはみ出した。それからも一つはみ出した。五匹の象が一へんに、屏からどつと落ちて來た。オツベルはケースを握つたまま、もうくしやくしやに潰れていた。早くも門があいていて、グララアガア、グララアガア、象がどしどしなだれ込む。

「牢はどこだ。」みんなは小屋に押し寄せる。丸太なんぞは、マツチのようへし折られ、あの白象は大へん瘠せて小屋を出た。

「まあ、よかつたねやせたねえ。」みんなはしづかにそばにより、鎖と銅をはずしてやつた。

「ああ、ありがとう。ほんとにぼくは助かつたよ。」白象はさびしくわらつてそう云つた。

おや「一字不明」、川へはいつちやいけないつたら。